



イラク・シリア：「イスラーム国」の生態（フランス人戦闘員の実態）

12月1日付け『LE FIGARO』紙は、現在「イスラーム国」に参加しているフランス人376名の多くが、家族にメールを送るなどして、フランスへの帰国を希望していると報じた。

彼らの多くは、実際に現地に到着しても戦闘に参加できなかつたり、給仕係や他の戦闘員の小間使いとして働かされたりした。その結果、「もう嫌になった。やつらは俺に皿洗いをさせるんだ」、「武器の手入れや死体運びの仕事をしているが、冬の寒さでとても厳しい」、「僕のiPodが壊れた。家に帰らなきゃ」といった「戦場」の「日常」に多くの不満を抱くに至った。その一方、実際に戦闘員から前線に行くよう指示を受けても、戦い方が分からないというのが彼らの実態である。

現在、フランスの弁護士団が彼らの家族を代表してフランス人戦闘員らの帰国を容易にするようフランス政府を説得中である。しかし、政府側は帰国した若者の一部が国内で破壊活動を行うことを危惧している。こうした政府の懸念を反映してか、これまでおよそ100名のフランス人戦闘員が帰国したが、そのうち76名は投獄されている。

評価

今回の出来事から分かることは二つある。第一に、イスラーム国が発信してきた戦闘や斬首の映像及びイスラーム国に忠誠を誓う各種個人・団体が発信する声明などによって作られてきた、イスラーム国の世界的拡大という印象とその現実は異なることである。「イスラーム国」の広報部はこれまで、高度な映像技術を用いて映像を配信して、世界の若者たちに向けて「イスラーム国」への「移住」を呼びかけてきた。そのほか、SNSを利用した勧誘活動を行ってきた。しかしながら、上記から分かるように、実際に「イスラーム国」に接した戦闘員の中で幻滅している者が少なからずいるのである。

第二に、生きがいや冒険心を満たすために戦闘に憧れたり、社会からの疎外感を解消したりするために「イスラーム国」に参加した若者を待っているのは、厳しい現実だということだ。また、今回のフランス人戦闘員の例から分かるように、一度「イスラーム国」の戦闘員になったものの当初の印象とは異なるとの理由で帰国を希望しても、自分たちが生活していた社会に復帰するためには、多くの時間を要することになる。

以上から、「イスラーム国」の広報部が発信する情報を鵜呑みし、そこから醸成される印象に囚われることは、彼らの実態を正確に把握し得ないこととなろう。

（イスラーム過激派モニター班）

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799